

平和への思い

上尾 朝子

戦争もたけなわ、終戦一年前の正月の酒一合配給があったが、私の家ではだれも酒飲まぬと思い辞退した。母が神様に供えるのにほしかったとつぶやいた。結婚衣料切符五百点、布は白い人絹よりなくどうしても必要な物を買う。配給のある度長蛇の列の中で並んで買った。父が「買い物するのに一日かかる」といって怒った。それでも私は飛び入りして早い列に割り込んで買った。けれどもそんなことは二度できなかった。母はリュウマチで寝ていた。布団を造るとき、中に綿も配給で黒色のすぐにちぎれてよれよれとなる綿、だがそれを入れなければ綿はない。自転車を借りて一里（約四キロメートル）近くある配給所へ買いにいった。女事務員は威張っていた。

それを積んでわが家へ帰った。裁縫の学校

へも行っていない私は表の柄物の端布を寄せ集めて縫わねば誰も縫ってはくれなかった。それが私の嫁入り布団であった。母は寝ていた。「着物が少ないな」と言った。そして母は「この貯金は下されないし、買えないな」と言った。母は木綿の絣（かすり）の配給のあった時、妹のモンペにして私にはなかった。私は兄弟七人の三番目で長姉は自分の職をつけるために他国へ行っていた。兄は出征しすぐ下の弟は病気であった。あと三人の妹や弟は小学校へ通っていた。私は二十三歳で私の希望はすべて抑えられた。婦人雑誌で夏服を縫うようになって、ミシンを買ってくれとせがんでも父は金をだすことを渋った。父は出店をしていた。私が出店へ通勤のための、自転車さえ無かった。

自宅が農村で、ちよつとばかりの田と畑があつて、それらも私が耕す役目であつた。村の用事も三日おき位にあつた。私が出なければだれも出ない。村の山の整理も私がでなけ

れば、金ではすまなかつた。そして軍事工場からは挺（てい）身隊を強制してきた。父は分厚い封筒の手紙を、私に渡してくれといったので係員に渡した。じろじろと私の顔を見下ろしていた挺身隊は行かなくて良いことになった。兄は出征から帰って来て第三火薬庫へ勤めた。兄は嫁さんをもらうのにまず私の嫁入りを考えていた。見合いの相手や嫁入り道具をそろえるために考えている様子であった。隣組班長は一年ごとに回って私の家が班長であった。

防空壕（ごう）は向かいの山すそに隣組で二時間ほど当番で堀り続けた。晴れた日にB二九が上空を飛んだ。乱れず間隔を崩さず音を立てて飛んだ。数か月後まさに空の戦いはじまった。焼い弾が雷のようなほど落ちる。雷そのものの音が数えられなかった。落ちたその音は、戦での激しさを知らせ数時間とも思われた。恐ろしく身の危険を感じる音であった。身体は震え続けた。舞鶴軍港がやら

れたのを知った。数十人の工場手も腹をやら
れて臓器が露出した人もあった。その日駅で
は帰らぬ人を待ち続けていた。待っても帰っ
て来ぬ人は多かった。弟は、パス、マイシン
等薬がなくて一年ほどで帰らぬ人となった。